リブライフの明日に向かって

▽「お母さん大学」のスタートを宣言して、間もなく1年になる。短いといえば短いが、私には、この1年は長い長い時間だった。それまではただ漠然と「お母さん大学」という言葉を使っていたが、トランタン新聞社の最後の事業と決心はするものの、お母さん大学をどう伝えていいのか、わからない。正直、悩んだ。お母さん大学とは、「お母さんを感じるプロジェクト」と宣言しても、その意味がわかる人は少ない。皆がわかる言葉で説明しなければ事業として成立しないと、誰もが言った。が、そのたびに自分の至らなさゆえ、言葉にすればするほど陳腐なものになる「お母さん大学」。眠れない日々が続いた。そんなことばかりしているので、当然、会社は経営的に苦しくなった。が、それでも納得できないことはしたくない。子育ての偉大さを伝える仕事だからこそ、自分にウソはつけない。

▽いつの時代もミニコミ紙づくりと資乏は同義語。それでもぎりぎりやって来られたのは、いつでも明日があったから。人の倍仕事をしたが、そんなことは誇れることではない。辛い時期もあったが、むしろ、好きな仕事ができる喜びのほうが大きかった。もうひとつは、がんばってくれたスタッフがいたから。これまで挫折したスタッフもたくさんいたが、今トランタン新聞社があるのは、その時代時代に一緒に汗を流してくれた仲間がいたからこそ。みんな子育てをしながら、よくがんばってくれた。「その人たちの分までがんばらなければ」という思いが、トランタン新聞社を続ける原動力になった。感謝の気持ちでいっぱいだ。最後の「お母さん大学」の事業も、これまでと同じ「営利追求」ではなく、「お母さんの笑顔追求」。しかも究極の笑顔だ。誰が何と言おうと、私はそのことに、とことんこだわりたい。

▽資金があれば、人がいれば、あんなことができる、こんなこともできる…。思いばかりでカタチにならない「お母さん大学」に無る日々もあった。が、悩みが極限になると、不思議なことに、天から答えが降ってきた。「今のトランタンにできること、今のあなたにできることをやればいいんだよ」と実にシンプルな答え。「えっ？」たったそれだけ？天に文句を言ったが（笑）、「悩む時期があったからこそ、道が開けるのだ」と。そうか、「自分ができることに最善を尽くす」こと。確かにできないことを無理するより、できることを最大限に生かすほうが何倍も効果がある。こんな単純なこともわからないバカな自分を笑った。余計なことばかり考えていた。おかしな意地やプライドもあった。捨て身になれない自分がいた。今さら会社を大きくしたいわけでもない。やりたいことはただひとつ。日本中のお母さんたちに、子育ての素晴らしさを伝えたい。

▽この54号は、「リブライフ」最後の新聞になる。5年近くは、まさに、学びの日々だった。生きるとは何？「お母さん」というステージから「人間」のステージに進化したいと「月刊お母さん業界新聞」から「リブライフ」へと新聞を移行したが、「人間とは何か」というテーマで躓いた。進化どころではない。が、この「リブライフ」をつくる中で、そのステージが、これからの子育て社会にどれほど必要なものかを強く感じた。人を産み育てる母親たちに必要なものが、ここにある。「月刊お母さん業界新聞」をつくっていた時代には、気づかなかったこと。「リブライフ」をつくるきっかけになったのは、沖縄のドリームプラネットインターナショナルスクールの子どもたち、そしてマキノ正幸氏。その出会いが、今の自分をつくっている。リブライフ…生きる人間の魂の叫び。

▽「リブライフ」が、私の価値観を大きく変えた。18年前に、母という小さなステージから始まった活動が、妻から女性の枠へと広がり、さらに人間というステージへ。そして、人間のステージが、いつしか「偉大なる母」へのステージへと広がった。子育ての素晴らしさ、母親の偉大さを感じることができたのは、「リブライフ」と出会い、「リブライフ」をつくってきたからといえる。ひとりの人間としての「母」を感じたからこそ、新しい「お母さん業界新聞」が誕生する。高齢出産ではあるが、この歳になったからこそ見えてきたことがある。個人的なことだが、孫の誕生は、そこに拍車をかけた。魂を掘さぶられる「感動」を教えられた。自分の子育てでは感じなかった感動。だからこそ、今、この感動を若いお母さんたちに伝えたい。

▽家庭の崩壊と地域の崩壊は相関関係にある。お金で地球は買えない。お金で子どもたちの笑顔は買えない。人間が人間の命を守るという当たり前のことが、見えなくなった社会。昨年は偽りのオンパレードだった。が、企業だけではない。教育の世界も、政治の世界も、金と欲に毒された人間たちが、今の社会をつくっている。そんな社会をつくってきた自分たちの功罪を誰もが自戒するときだろう。子育てをしているお母さんであれば、「いつか」ではなく、「一日も早く」そのことに気づいてほしいと願い、また気づくはずと信じている。なぜなら、わが子の笑顔がお母さんの元気。だからこそ、何度も言うが、心から「お母さんになろう」と「お母さん大学」は、お母さんを感じるプロジェクト…。その意味がわからないというなら、その意味を伝えることが「お母さん大学」だ。ちょっとクサイが、これからの地球を救うのは、「お母さんの愛」しかない。そう断言する。

▽今は、施設もお金もない「お母さん大学」。あるのは、これまでトランタンネットワーク新聞社が発信してきた「子育ての情報」と「お母さんネットワーク」だけ。情報社会の今、誰が何をどう発信するか。また、今の母親たちに必要な情報は、ただの情報ではなく、目に見えないホットライン（つながり）のようなものだろう。地域や家庭が見えなくなっている時代だからこそ、ひとりで子育てをするのではなく、響感し合うお母さんたちみんなで、未来を創造していくことが大切だ。新聞をつくる過程で、たくさんの人と出会い、新しい価値観や、人としての喜びや責任を学ぶ。それが、私が目指す「お母さん大学」だ。

▽地域から公園で遊ぶ子どもたちの姿が消えていった。学校では、子どもたちの間で、じわじわと気持ち悪い空間が昌延している。まさに子ども社会が、現代社会の縮図となっている。昔のような、明るくやんちゃないじめっ子はいない。子どもたちの心が灰色になっていく。空を見上げない子、星に感動しない子…。このままでは、子どもたちの心がだんだん小さくなって消えてしまう。今の子どもたちの問題ではない。昔も今も、子どもたちの本質は変わらない。あの笑顔の子どもたちを、まっすぐに見てほしい。それが、どんなに癒されるものであるか、どんなに愛おしいか…。今こそ、「子育てとは何か」を本気で考える時だ。自分の子どもたちだけではない。すべての子どもたちが生きる地域や学校、さらには地球レベルで考えていかなければならないほど大きな問題である。自分の子さえ良ければ、もう通用しない。人間である意味を、本気で考える時。

▽先日、ボストンに投函されていた、子どものサッカークラブ員募集チラシを見て驚いた。「挨拶はできますか？ 何かを変えるなら今！」というタイトルがついている。そこに書いてあるのは、サッカーというスポーツをどう楽しむかではなく、「ゲーム世代の子どもたちは、外で遊ぶ機会や人との関わりが減って、挨拶もできない」と。つまり、クラブの目的は「日常生活に必要な挨拶や団体生活のルールやマナーを学習すること」とある。さらにご丁寧なことに、「保護者の負担を軽減するため、お茶当番、連絡係などをお願いすることはありません」と記されている。これがニーズに合っているというのなら、大きく何かがズレている。親の役割、家庭の役割、子どものスポーツクラブの役割とは？ ここまで世の中がおかしくなっている。本来、挨拶は家庭で教えるもの。私がクラブ関係者だったら、「参加者の条件は、挨拶ができる子ども」と書くが、これではメンバーが集まらないのだろうか。

▽先日、講師に招かれた講演会での出来事。子育ての講演会に、参加者はなぜかお年寄りばかり。おそらく動員か何かだろう。皆さん、子育て支援をしたいというわけでもなさそうだ。ご年配の女性に多いのだが、私が「お母さん大学」の話をすると、「子育てはどうでも終わったので、私には関係ない」と。そんなとき、時間を入れずに言う。「今の子育ての問題は、すべて「アタシたち」の責任です」と。関係ないとは言わせない。自分の子育てが終わったのなら、これからは、地域にいる、すべての子どもたちの「お母さん」になってほしい。せっかくお母さんという素晴らしい業を授かったのに、それを生かさず老いていくのは、あまりにももったいない。きっい言葉に眉をしかめる人もいるが、中には講演が終わると同時に、「目が覚めた」と駆け寄って来られる方も稀にいる。そんなとき、小さな希望が生まれる。

▽北海道のある街で、子どもを1か月も置き去りにし、死亡させてしまった事件が明るみに出た。母親は21歳。1か月間、いえ、1日だって、暗い部屋でお母さんの帰りを待ちわびている子どものことを感じなかったのか。自分が食事をしているとき、子どもがどんなにお腹を空かせているかと想像できなかったのか。「もう死んでると思った…」と母親。5歳と1歳の幼い兄弟は、極限の中で母に抱かれるその日を待ち続けていたというのに。そして5歳の長男は、母への思いを生命力に変え、マヨネーズや生米を食べて生き続けた。切ないことに、戻った母に「ママ、遅かったね」と抱きついたという。人間の命とは何か？ マスコミの報道によると、亡くなった弟の名前は青空と書いて「そらくん」という。奇跡的に命を保ったその子は、これからどう生きていくのか。毎朝、青空を見るたびに、母を待ちわびて死んでいった弟を思うのだろうか。そんな幼い子どもを、誰一人救える人はいなかったのか。世界中の愛を集めてその子に届けたとしても、その子の心を満たすことはできない。それができるのは、唯一、母親だけ。だがこの事件を見て、その若い母親だけを責められるのだろうか。私たちすべての人間の問題だ。

▽「見えない力」を感じている。「できることを全力でやればいい」という天？からのお告げを感じてからは、不思議に道が広げてきた。突然に、紙媒体をつくる幸運が舞い込んで来た。ある印刷会社からは「ご協力します」という言葉をいただき、信じられなかった。もちろん期間限定の協力だが、今この時期にできる意味を考えた。日本中のお母さんに、子育ての素晴らしさを伝えなければ。どこかで誰かが、見えない大きな力を与えてくれているように思えた。4月には、創刊準備号を発行。10万部の新聞だ。一人でも多くのお母さんに届けるために、無料配布を決断した。情報は決して無料ではないが、お金を払う意識がない人にこそ、この新聞を読んでもらいたい。地域には、密室育児に苦しむ例も少なくない。スーパーやコンビニ、銀行や郵便局、保健所や公共施設など。あとは、10万部の新聞をどう配布するかという問題だ。実際、配布にも相当なお金がかかる。現在、配布の協力企業（団体、個人）を募っている。もちろん、一番の担い手はお母さんたち。新聞を手から手へと配る。道で出会ったお母さんに、「お母さんの新聞です。読んでみてください」と声をかける。「お子さん何歳ですか？」と会話が始まる。これが、どれだけ社会の大きな力になるか。10万部では足りない。新聞を100万部まで広げる。まずは一歩踏み出そう。

▽何といっても、ウェブの素晴らしさは、トランタン新聞社のような小さな会社でも、一度に100万人に伝えることができること。一方でウェブの限界は、一歩間違えれば、匿名性の無責任な情報になりかねないということ。だからこそ、紙媒体をつくり、誰が発信するかにもこだわりたい。「お母さん大学」では、この両メディアを駆使し、十万馬力ならぬ「百万母力」の媒体を目指していく。発信するお母さん記者たちには、「マザー・ジャーナリスト」として学びながら、ひとりの人間であることをこの場で感じてもらう。「お母さんがつくる、お母さんのための、100万母力の子育て情報紙」は、地域版、PR版、企業版も追加しながら部数を拡大していく。もう悩んでなんか、いられない規模。この事業は、私たちだけでは実現でき得ない。すべてのお母さん、すべての地域、すべての企業の皆様に、ご協力をお願いいたします。

▽現在、第1陣として数十人のお母さん記者のタマゴたちが、発信を開始した。発信することは自体が学びであることも、発信していくうちにわかってくるだろう。「お母さん大学」では、ウェブの活用法、企画の立て方、取材の仕方、記事の書き方、などを学ぶ。もっといえば、人とのコミュニケーション、子育てや生き方…「人間学」といえるのかもしれない。子どもと向き合う毎日だったお母さんたちに、社会というステージに立つ自分を感じてもらう。自分の目で、心で感じて、自分の言葉で発信する。その心地よさ、気持ちよさが、未来の子育て社会をつくる。母親たちにとっては、大海原に船出するようなもの。がんばれ、お母さん記者。未来をつくる仕事の始まりだ。その溢れる感動を仲間と共有することで、感動は何倍にもなるだろう。ひとりの母親の小さな思いが100万人に届いたら、100万人の力になる。だから、新聞のキャッチコピーは、「100万母力の子育て情報紙」だ。

▽この春「お母さん大学」を開校。そして「お母さん業界新聞」を復活創刊します。これまで「リブライフ」を読んでくださった皆様には、心から感謝いたします。リブライフという新聞の力タチはなくなりますが、リブライフは、私の心の奥深くにしっかり生きています。リブライフの魂を込めて、全国のお母さんたちと、新しい新聞をつくっていきたいと思います。「お母さん業界新聞」復活版の主役は、これから夢に向かって走るお母さんたち。私は、お母さんたちの傍で、もう一度、「お母さん」について学び、考えたいと思っています。お母さんで始まり、お母さんで終わる。それができたら本望です。

改めて、「リブライフ」をご購読いただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました！ そして、これからも応援をよろしくお願いいたします。力の続く限り、がんばろうと思います。

藤本裕子

100万母力の子育て情報紙！ http://www.okaasan.net/

『月刊お母さん業界新聞』を復活創刊！

3月4日に事務所が移転します

新しい事務所は、現在のトランタン新聞社の隣のビルです。今より少しだけ広くなりますので、お母さんたちとの編集会議もできそうです。どうぞ、お気軽にお越しください。

株式会社トランタンネットワーク新聞社
〒221-0055 横浜市神奈川区大野町1-8-406
TEL045-444-4030 FAX045-444-4031
※TEL、FAX、E-mailは、変わりません。